

アラスカの夏の俳句 (2)

松 井 貴 子

はじめに

本稿は、拙稿「アラスカの夏の俳句 (1)」¹の続編である。デイビッド・フープスとダイアナ・ティヨンによって、1972年に刊行された「アラスカ俳句集」²に収録された夏の句について、引き続き、翻訳と翻句、評釈を試みる。

「アラスカ俳句集」では、二十一世紀の現代にあって、いまだ手つかずの自然が残る広大なアラスカの大地が、日本の俳句を模した十七音節の三行詩に英語で詠まれている。二人の作者は、この小さな詩型に大きな世界を詠みこめることに感動し、アラスカの自然が季節とともに変化する様子を、詩人としての自らの実感によってとらえている。作者たち自身が、この句集の読者となるアメリカ人に対して、句を通してアラスカの四季とアラスカの自然が作る季節感を楽しむことを期待しているのは、気候風土の違いを超えて季節感を共有できる可能性を示唆している。

I アラスカの夏

アラスカは、北極圏を含む寒帯から亜寒帯にある。当地の季節感覚では、雪解けの後、間もなく夏が始まる。紅葉を迎えて夏が終わるまで、アラスカでは農作物の収穫期である。アンカレジの夏の日ざしは強く、冷房が使われている建物もある。温帯の夏と同じように、夏服にサングラスや帽子を身につけ、戸外で暑さの中に涼を感じる夏の楽しみがアラスカにもある。

「アラスカ俳句集」の夏の句では、アラスカの夏の太陽や月、海と空、大地、鳥や貝、木々や草花が多く詠まれている。

現在の日本の歳時記では、季語が、時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物に分類されている。アラスカの夏の俳句として収録された五十六句は、この順番に倣っているように見えるが、天

文と地理の間に雑の句があること、生活、行事の句が詠まれていること、動物、植物の句に、哲学的な句が挿入されていることが、日本の歳時記と異なる構成である。

II 翻訳・翻句・評釈

夏の句五十六句のうち、最初の十句については、「1 時候」夏の日（太陽）を詠んだ時候の句他、「2 天文」星と露を詠んだ天文の句、「3 雑（無季）」明確に夏であることを示す季語が使われていない無季の句とした。これに続いて、「4 地理①山・水辺」「5 地理②太陽・月と海」について、翻訳、翻句、評釈を試みたい。

4 地理①山・水辺

地理に分類される季語は、山野や海、川、湖が季節的特徴を表わす様子を象徴する。この句集では、アラスカの山を中心に詠まれている。

Down the cobbled trail,
The lone climber emerges
From height of wonder.³

小石で舗装された小道を下って、
連れのいない登山者が現れる
驚くべき高さから。

高さより登山者独り砂利小道

日本の歳時記には、「登高」「高きに登る」という季語がある。九月九日に、山や塔などの高いところに登って災厄を避けるというもので、秋の季語である。秋の訪れが日本よりも早いアラスカでは、暦の上で夏の時期に味わうことができる季節感であるかもしれない。

The lone waterfall
Thunders down the moss-wet rocks
Into the rank leaves.⁴

人が寄りつかない滝
苔で湿った岩を雷が下る
繁った葉の中に向かって。

人来ぬ滝茂る苔岩雷走る

夏の季語満載の句である。「滝」が地理、「雷」が天文に分類される。「苔」は「苔の花」「青苔」、「繁った葉」は「茂る」という植物に分類される夏の季語がある。この句は、江戸時代に詠まれた素堂の「目には青葉山郭公初鯉」という夏の句を思い起こさせる。

Top of the world—
Time has come to descend
How many miles.⁵

地球の天辺—
下りる時が来た
何マイルだろう。

何マイル地の頂を下りるとき

世の中で一番高い所に目を向けて詠んでいるところが、「登高」「高きに登る」の季語が表わす世界に通じる。秋の早いアラスカらしさの現れた句である。

Both his hungry eyes
Drawn to the highest mountain
Upon his return.⁶

飢えた両の眼が
一番高い山に引きつけられた
帰郷の途上

飢えた眼を最高峰が捉う帰路

この句も、最も高い山を詠んでおり、「登高」「高

きに登る」の季語が表わす世界に通じている。

Morning mists and light
Cover the distant hilltops—
Shadows always change.⁷

朝靄と朝日が
遠く離れた丘々の頂きを覆う—
日影が常に変化する。

朝靄の丘陵日影動き行く

日本の季語では、「朝焼」「朝曇」が夏で、「靄」は無季、「霞」が春、「霧」が秋である。夏は他の季節より日ざしが強くなり、それだけ日影の色が濃くなる。刻々と変化する影に注目しているのは、そのためであろう。

Early morning dew,
When it is spilled from the grass,
Is simply water.⁸

早朝の露が、
草からこぼれ落ちて、
ただの水になる。

朝まだき露こぼれ落つ草の水

日本の季節感では、「露」は秋の季語であるが、草が「草茂る」「草刈」で夏の季語となる。詩語としての「露」が伝える儚さの感覚は不安定さ、この句が示すような、元の特性を容易に失ってしまう変わりやすさによるものかもしれない。

Outside my window
An exultation of larks
Welcomes the morning.⁹

窓の外
狂喜する雲雀たち
朝の訪れを喜び迎えている。

夏雲雀朝を喜ぶ窓の外

日本の季語では、「雲雀」が春である。同じく春の季語である「鶯」が、春を過ぎても高地などで見られるので、「老鶯」「夏鶯」という夏の季語となっている。緯度の高いアラスカでは、日本での高地のように、春の季語となっている「雲雀」が夏にも見られるということであろう。

Beauty sustains life,
Exalts a tiny dewdrop—
My tranquilizer.¹⁰

美は人生を支える、
小さな小さな露のしずく—
私の心を落ち着かせるもの。

露しずく人を支える美と沈静

「露」は、日本の季語では秋で、和歌の伝統を引いて、命を始めとして、様々な物事がはかなく、空しいことの比喩に使われてきた。この句では、日本の「露」の本意を、「美と精神の安定」として捉え直している。

Perfect reflection
Stolen from the water's face—
Wind from the mountain.¹¹

原物そのままの反射影が
水面から盗まれた—
山からの風

山嵐水面の射映盗み取る

「山の風」は無季であるが、山と水を組み合わせた「山滴る」が日本の夏の季語にある。山風に水面が揺れる水辺に人が訪れるには夏が似つかわしく思われる。

Darkness and quiet come—
Winds, having sobbed their fill,
Are now more subdued.¹²

暗闇と静けさが来る—

風が音を立てて吹き満ちていたけれど、
今は、それよりも弱まっている。

闇静か猛き風音鎮まりぬ

風は、春夏秋冬のいずれかの語をつけるか、あるいは、夏であれば、「南風」「青嵐」「風薫る」のように季節的特徴を付して天文に分類される季語となる。風音のみによって季節を特定することは難しい。

Another long day—
My eyes grow weary gazing
Over sunlit seas.¹³

また退屈な一日—
私の眼はうんざりとしてじっと見つめるようになる
日のあたる海を。

また長き終日見つむ日なた海

変化に乏しい時間が長く感じられるのは、日本よりも暑さが厳しくならないアラスカの夏に味わうことができる感覚であろう。日本の季節感では、このような倦怠感を含んだ感覚は春に多く感じられる。

A wind from the hills
Murmurs softly in the night—
Skies are slow to clear.¹⁴

丘々の風が
夜優しくざわめく—
天空はなかなか澄まない。

丘の風囁く夜の天澄まぬ

空が詩語として使われるとき、空の広がりや複数形によって表現されることがある。また、空は神聖さや純潔を象徴することもある。空が澄んで見えるのは、日本では夏よりも湿度が下がる秋であり、夏は、それを待つ季節である。

The current surges;
Water follows gravity,
As my heart to you.¹⁵

流れていくうねり、
水は重力に従う、
あなたへの私の心のように。

我が想いのごときうねり流れゆく

水は暑い夏に涼をもたらしてくれるため、「清水」「滴り」「泉」などが夏の季語となっている。この句に詠まれているような強い水の動きは、「出水」や「滝」「夏の川」という季語によって描写される。海についても、勢いのある流れのある「夏の潮」や大きな波の「土用波」という季語があり、「夏の海」はそれだけで光に満ちた力強さを感じさせる季語である。

Caught by distant clouds,
Sunset's flames smoldering out
Briefly flare again.¹⁶

遠くの雲にとらわれて、
夕陽の火炎がくすぶり出ている
また一瞬ぱっと燃え立つ。

雲隠れ夕陽一瞬燃え立ちぬ

夏の夕焼けは、他の季節よりも盛大に美しく見えるため夏の季語となっている。夕焼になる前、なかなか沈まない夏の太陽は「西日」「大西日」という季語になっているが、その後に西に沈む日に、日本では西方浄土を感じることもあるという。雲間でもエネルギーを発し続ける夕陽に夏らしさがある。

Clearing to the west—
Row upon row of mountains
In the pale blue sky.¹⁷

西部開拓—
山並が幾重にも連なる

淡青の空に。

西部への淡青の空山連ね

アメリカは東部から中西部を経て西海岸まで開拓が進められた。アラスカは、地理的には北米大陸で最西端に位置している。雪と氷に閉ざされる季節に未開の地に向かうことは難しい。開拓が最も進められるのが夏だったのであろう。

5 地理②太陽・月と海

次の四句では、アラスカの山から海に眼が移り、空と太陽や月に着目して詠まれている。

Glowing through the fog—
The full moon casts no pathway
Upon a quiet sea.¹⁸

霧を通り抜けて白光を放ちながら—
満月は一本の通路も下ろさない
静かな海の上には。

霧月光静かな海に通わざる

「霧」「満月」が日本では秋の季語である。ハワイや台湾のような亜熱帯地方で、春や秋の季語の一部が冬の季語として使われるように、アラスカのような極地では、春や秋の季語の一部が夏の季語として使われている句例である。

Quietly the orange sun
Now sinks beneath the sea-edge,
Marking the day's end.¹⁹

穏やかなオレンジ色の太陽
今、海の水平線の真下に沈む
一日の終わりの痕をつける

海に沈む橙夕陽一日終ゆ

日本では赤色と認識されている太陽が、アラスカではオレンジ色になっている。極地の夕陽は、真紅ではなく柔らかな橙色に見えているのである。

る。「夕焼」が夏の季語である。

Oh the evening sky—
Quiet uncommitted hour,
Neither day nor night.²⁰

ああ宵の空—
静かな何もなくてよい時間、
昼でも夜でもなく。

夕空は昼夜の狭間無為の静

空は「夏の空」で夏の季語となる。夏の夕方には「夏夕」という季語があり、日中の厳しい暑さが穏やかになり過ごしやすくなることが第一義である。この句でも、夏の昼間に活動的な時間を過ごした後、夜を迎えるまでの間のくつろぎの時間としてとらえられている。

The sun, moon, and earth;
A small piece of universe—
Here seen they are one.²¹

太陽と月と地球、
宇宙の小さな断片—
ここでは一つに見える。

宇宙の欠片地球日月まともりぬ

太陽や月は、「夏の日」「夏の月」のように季節を表わす語を付して、それぞれの季節に現れる太陽や月の季節的特徴を表わす季語となる。地上から見れば、夏のアラスカの大地も空も広大であるが、その先に広がる宇宙では、太陽も月も地球もごく小さな存在である。

おわりに

俳句作品に季節を詠み込むことが日本語であっても、英語であっても可能であることは、これまで実際に作られてきた膨大な数の作品に表れている。日本人であっても、アメリカ人であっても、季節を意識し、その特徴をつかんで、作品に詠んでいる。それでも、外国人には季節感がないとい

う言説が絶えないのは、日本の季語が表わす季節感を、外国人が理解することが難しいことによるものである。

その難しさの一因が、季語が持っている古典和歌に由来する文学的伝統である。しかし、これは、日本人であっても、特別に学ぶことを必要とするものであり、一般的な日本人が、学校教育などで普通に身につけるものではない。もう一つ、外国人に季節感がないという誤解を生じさせている理由が、季語が表わす季節感と素朴に実感する季節感とのずれである。これは、文学的季節感と実感との不一致によるものでもあるが、それ以上に、暦の問題がある。

俳句の季節感は、農業暦に適って、江戸時代まで使われていた旧暦（太陰暦）に基いている。しかし、明治時代になって、新暦（太陽暦）に改暦されたため、それまで使われていた四季の区分、春・夏・秋・冬に、新たに「新年」という区分が加えられ、例えば、旧暦では、春の始まりは一月（新年）であったが、現代の歳時記では立春は二月になっている。それでも、歳時記が規定する季節と生活実感とのずれが、一ヶ月ほどある。

英語で日本文化を発信することを目的にしたNHKの教育番組「トラッドジャパン」の「俳句」の回（2012・9・4、8日放送）では、俳句の季節感が、なぜ、実感とずれているのか、そのような俳句の季語を英語にどう訳すか、について、「二十四節気」を手がかりとして考察が加えられている。「二十四節気」は、太陽の運行をもとに一年を二十四に分けたもので、月の運行をもとにつくられた旧暦で表わせない気候の変化を補完するものであるという。

北半球での季節概念を、二十四節気を用いて、「昼と夜の長さが同じになる春分（3月21日ごろ）から、昼が最も長くなる夏至（6月22日ごろ）までが春。同様に、夏至から秋分までが夏。秋分から冬至までが秋。冬至から春分までが冬」²²と規定している。これに対して、旧暦に基く俳句の季語は、立春から立夏（1～3月）が春であったが、これを、現行暦にすると、2月4日ごろから5月6日ごろまでが春になり、実感より一ヶ月ほど早く、暦上の季節が来てしまうとしている。立夏から立秋（8月8日ごろ）までの夏、立秋から立冬

(11月7日ごろ)までの秋、立冬から立春までの冬についても同様である。このため、「季語でいう春は2月初旬から始まるため、暖かい季節というよりも暖かさへ向かう季節」²³であり、「夏は5月上旬から始まるため、暑い季節というよりも暑さへ向かう季節というイメージ」²⁴になるとしている。

このような季節のずれがあるために、「立春」を直訳して early spring としても、2月4日ごろの旧暦の正月のイメージは伝わらず、立秋になっても暑い日が続くことを表わす「残暑」を、その意味の通りに early autumn と訳しても、「立秋は8月8日ごろなので現代の季節感では summer の真っ只中」²⁵であるため、本来の意味が伝わらないとしている。

そして、「俳句で使う季語は、現代とは違う季節感に基づいています。季語を英語に訳す時は、二十四節気を念頭に置いて訳語を工夫する必要があります。」²⁶と結んでいる。

文学的伝統を含む季節感や暦と現実のずれを含む季節感を、相応の学習なしで共有することが難しいのは明らかである。日本人と外国人が季節感を共有できるか否かを論じる際には、日本の俳句の季節感が持つ特殊性を勘案する必要がある。生活実感から距離のある季節感を基準にして、季節感を共有する可能性を否定することは無意味である。

このような季節感ではなく、一般の人々が、生活のなかで素朴に感じる季節感、生活実感を伴う季節感覚を日本人と外国人が共有できることを探ることが、作者の実体験から生じる感動を詠むことを基本とする近代俳句の本質に適うものであると思われる。

参考文献

- 松井貴子 (2011) 「アラスカ俳句のためのノート」『外国文学』60号、67-81頁。
- 松井貴子 (2007) 「『俳句』試訳—アメリカ発俳句入門 (1)」『外国文学』56号、197 - 201頁。
- 松井貴子 (2012) 「『俳句』試訳—アメリカ発俳句入門 (2)」『外国文学』61号、109 - 111頁。
- 松井貴子 (2012) 「アラスカの夏の俳句 (1)」『宇都宮大学国際学部論集』34号、83 - 88頁。

日本放送協会編 (2012) 「Words & Culture 季語はどう訳すか」「NHK テレビ トラッドジャパン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」、NHK 出版、42 - 45頁。

References

- Anderson, Jim (2004) *Fall: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
- Blodgett, Bonnie (2004) *Summer: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
- Chandoha, Walter (2004) *Winter: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
- Evans, Mary (2004) *Spring: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
- Hoopes, David. Tillion, Diana (1972) *Alaska in Haiku*, Charles E. Tuttle Company.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *Spring: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *Summer: The seasons*, Macmillan Education Australia.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *Autumn: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *Winter: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *The Dry: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
- Pelusey, Michael and Jane (2007) *The Wet: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
- Prisant, Kathleen (2004) *The Holiday Table: Crafts & Cuisine*, Creative Home Arts Club.
- Ross, Bruce ed. (1993) *Haiku Moment: An Anthology of Contemporary North American Haiku*, Charles E. Tuttle Company.

本研究は、平成 21-24 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「季節感、季節認識に関する比較文化研究—俳句の国際化を視座として」による成果である。

¹ 松井貴子 (2012) 「アラスカの夏の俳句 (1)」。

² Hoopes, Tillion(1972) *Alaska in Haiku*.

³ Hoopes, Tillion(1972), p.28.

⁴ Hoopes, Tillion(1972), p.28.

⁵ Hoopes, Tillion(1972), p.29.

⁶ Hoopes. Tillion(1972), p.29.

⁷ Hoopes. Tillion(1972), p.30.

⁸ Hoopes. Tillion(1972), p.30.

⁹ Hoopes. Tillion(1972), p.30.

¹⁰ Hoopes. Tillion(1972), p.30.

¹¹ Hoopes. Tillion(1972), p.31.

¹² Hoopes. Tillion(1972), p.32.

¹³ Hoopes. Tillion(1972), p.32.

¹⁴ Hoopes. Tillion(1972), p.32.

¹⁵ Hoopes. Tillion(1972), p.32.

¹⁶ Hoopes. Tillion(1972), p.33.

¹⁷ Hoopes. Tillion(1972), p.33.

¹⁸ Hoopes. Tillion(1972), p.34.

¹⁹ Hoopes. Tillion(1972), p.34.

²⁰ Hoopes. Tillion(1972), p.35.

²¹ Hoopes. Tillion(1972), p.35.

²² 日本放送協会編 (2012)「NHK テレビ トラッドジャ
パン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」p.44.

²³ 日本放送協会編 (2012)「NHK テレビ トラッドジャ
パン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」p.44.

²⁴ 日本放送協会編 (2012)「NHK テレビ トラッドジャ
パン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」p.44.

²⁵ 日本放送協会編 (2012)「NHK テレビ トラッドジャ
パン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」p.45.

²⁶ 日本放送協会編 (2012)「NHK テレビ トラッドジャ
パン 俳句 とうふ お遍路 日本のあかり」p.45.

Summer Alaska in Haiku (2)

MATSUI Takako

Abstract

This paper continues ‘Summer Alaska in Haiku (1)’.

The most prominent feature of summer is the heat. Summer is hotter than any other season. At the same time, summer is dry or wet in some regions of the world. For example, since Japan is situated in a temperate zone in East Asia, people often feel high temperature and humidity especially in early summer during the rainy season.

Summer occurs, however, not only in the temperate and tropical zones but also in the polar zones such as Alaska, where there is a rhythm to the seasons as well. The sun becomes strong so plants grow very well and people and animals are active during the summer even in Alaska.

D. Hoops and D. Tillion composed four-seasons haiku in Alaska and their haiku were published in *Alaska in Haiku* in 1972. They subtly perceived Alaskan seasonal changes all the year round and vividly described nature at any season with their lively inspired seasonal feelings.

The summer haiku in their haiku collection seems to have imitated the form of Japanese *saijiki*, a catalog of season-specific words used in composing haiku. Japanese *saijiki* usually consists of the categories of 1) seasons, 2) heavens, 3) earth, 4) humanity, 5) observances, 6) animals and 7) plants. This classification was formally adopted as English *saijiki* in *Haiku World: An International Poetry Almanac* by W. J. Higginson in 1996.

Hoops who composed the majority of the haiku published in *Alaska in Haiku* showed his specialty as a fishery research biologist in those haiku. In addition, he seems to have been interested in things human and included some philosophical haiku as well.

(2012 年 11 月 1 日受理)